

**小学校外国語教育が教科の本質に迫るには**  
**— 小学校外国語教育が追い求めるコミュニケーション能力とは —**

西原 美幸

**1 単元構成・授業づくりの観点から**

**(1) 学習指導要領と外国語教育**

学習指導要領で謳われている「主体的・対話的で深い学び」と外国語活動や外国語科における「コミュニケーション能力の育成」を連動させ、具体的な子どもの姿をイメージする。

まず、外国語教育における「主体的な学び」の観点から次の点が重要であろう。

- ① 外国語を学んだり外国語を用いてコミュニケーションを図ったりすることに興味・関心をもつ
- ② 生涯にわたり外国語によるコミュニケーションを通して社会・世界と関り、学んだことを活かそうとする
- ③ コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定したり理解したりして見通しをもって粘り強く取り組む
- ④ 自らの学習やコミュニケーションを振り返り、次の学習につなげる

次に「対話的な学び」については、表面的なやり取りのことではなく、他者を尊重する思いと一緒に、情報や考え等を伝え合い、自らの考えを広げたり深めたりすることが肝要であろう。

最後に、外国語教育における「深い学び」については、以下の点が肝要であろう。

- ① コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて思考力・判断力・表現力等を発揮する中で、言語の働きや役割に関する理解や外国語の音声、語彙・表現、文構造に関する知識がさらに深まり、それらの知識を聞くこと、読むこと、話すこと（やり取り・発表）、書くことにおいて実際のコミュニケーションで運用する技能がより確実なものとなるようにする
- ② 深い理解と確実な技能に支えられて、外国語教育において育まれる「見方・考え方」を働かせて思考力・判断力・表現力等が活用されるようにする

このように別々に要素を記したが、よく見ていくと「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善もそれぞれの要素が単独して獲得されたり指導を行われたりするのではなく、往還・連動して育成されていくことがわかる。

**(2) 筆者の学習指導観と外国語教育**

子ども自身が自己省察から自己調整・自己修正を図り、自身で学習観を形成する

「Do (まずやってみる) → Learn (気づき, 修正・調整を図る) → Do again (再挑戦する)」

筆者が課題意識としてもつ「子どもの変容」には何が必要かを考えると、子どもが〈他者〉(学ぶ対象・相手・自己内他者)に価値を見出すことができるかどうかである。そしてそのための教師の働きかけについて考えたい。

〈他者〉に価値を見出すことは「自己の変容」につながる。ただ、変容は自覚してこそ意味がある。子どもは自己の学びの変容を自覚することにより、学ぶ意味を感じたり、自分に自信をもったりすることができる。いくら〈他者〉(この場合は教師や友達)から「変わったね」「良くなったね」と言われたとしても本人にその自覚がなければその言葉は意味をもたないだろう。学びにおける「自己の変容」を実感することは、自分の中にある「価値の成長」を自覚することである。子ども自身が自身で主体的に学習観を形成していくのである。

友達の解決方法や考え方、発想、表現方法等から見出した「価値」によって、子どもに自身の「価値」が成長したことを自覚できるようにしていきたい。子どもが自己の学びの変容を実感する際には、友達の存在が不可欠であること、友達の表現から「価値」を見出すという行為自体に「価値」があることから友達の存在を意識させるような「振り返り」をしていく必要もあると考える。

その課題を克服するために、これまでの英語科授業において、英語によるコミュニケーションの経験を豊富に積み重ねることによって、コミュニケーションを図る相手が誰なのか)を明確に感じながら、相手に合ったコミュニケーションの方法を探らせる機会を設定すること、そして、小学校卒業段階では、英語は借り物のことばではなく、「当事者」として自分の第二のことばであるという意識に近づけ、多角的な視点から思考・判断したことを母語や英語で表現し合えるようにすることを大切にしてきた。

しかしながら、他教科・他領域と大きく異なる点として、使用言語が外国語であるため、母語での学びとは異なる子どもの姿が見られる。英語での学習活動の難しさは英語を使用する分量を多くする方向へもっていかなければならない点である。結果として、「活発に対話できた」という内省が児童の中に起こったとしても、実際には日本語介入が多い場合がある。日本語がゼロである必要は全くないが、単元・授業デザインとしては少しでも英語のインプットやアウトプットを多くする方向にもっていかなければならない。そこで適切な「学び」が起こらないと「学んだ」印象は残っても、英語に関して本質的にはあまり残らないということになりかねないからである。英語科の教科特性を踏まえ、言語学習の観点から、その課題に対して指導者がどう対応するかが肝である。

## 2 研究課題「小学校外国語教育が教科の本質に迫るには - 小学校外国語教育が追い

## 求めるコミュニケーション能力とは - 」について

### (1) コミュニケーションの本質

最初に、外国語教育の目的は外国語運用能力の育成や異文化理解等、重要な点はいくつかあるが、筆者は「外国語によるコミュニケーション能力の育成」に尽きると述べた。文部科学省（2019）では、コミュニケーション能力を「色々な価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら人間関係やチームワークを形成し、正解のない話題や経験したことの無い問題について対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義している。コミュニケーションに必要な力は、「聞く」「読む」「話す」「書く」といった言語活動のほか、非言語による伝達手段（イメージ・身体・音）も含めた広範な活動にかかわるものであるとされており、気持ちや考えを表現し、伝え合うことは他者との関りの際に必要となる能力である。自分の思いをわかってもらおうとしたり、相手の思いをわかろうとしたりするためには、互いへの配慮や、粘り強く伝えようとしたり、相手の意図をくみとろうとしたりする意思がないと成り立たない。話し手は、自分の言いたいことを理解してもらうために、より伝わりやすい表現を探したり、より内容にあった表情やジェスチャーで補ったりするだろう。聞き手は、相手が伝えようとしていることを的確に理解するために、質問をして相手の思いを引き出したり、相槌を打つことで自分が理解しているかどうかを伝えたりするだろう。互いに支え合いながらのコミュニケーションを実感することは、「伝わった」「わかった」という達成感や充実感につながり、さらなるコミュニケーションへの足掛かりとなる。

とはいえ、まだ外国語学習初期段階である。その場で考えながら行う即興的なやり取りでは、英語表現を思いつくのに思考のほとんどを使ってしまい相手への配慮までなかなか気がまわらない。指導者は聞き手が相手の話している英語表現よりも内容に注意を向けるようにすると、話し手は心理的な安全性を感じることができる。聞き手が内容ではなく、表現に注意を向けていると、話し手は何らかの評価をされているように感じ、「間違っただけいけない」とプレッシャーを感じるのである。わからなければその時に皆で協力して英語表現を考えるなり、指導者に尋ねるなりして表現を獲得していけばよいのである。

そもそも子どもにとっては、相手に伝えることよりも、自分が発信することが優先される。「先生！見て！聞いて！」と自分ができるようになったことやこれからやろうと思っていることを認めてもらいたいものだ。また、友達同士の対話においても、一見対話が成立しているように見えても、実際自分の言い分や思いを一方向的に相手に伝えて、相手の言い分を受け取る姿勢が十分ではない。コミュニケーションには相手があって初めて成立するという前提があり、それを育成するという点で課題があると危機感を抱いている（このコミュニケーションとは、心地よいコミュニケーションだけ

ではなく、時として主張したり交渉したり合意形成したりといった人が本来「できることなら避けたいコミュニケーション」も含む)。

また、この意識こそが「日本人が英語を使えない」原因の一因だと確信する。相手の存在を十分意識しない結果、「アイコンタクトや適切なボディランゲージを交えて、相手の理解を確かめながら英語でコミュニケーションをとることができない」「事前準備して練習したものは話すことができて、即興で対話を発展させたり深めたりすることができない」という状況である。これは、子どもに限った話ではなく、大人全般に言えることである。

上記の課題を克服し、英語によるコミュニケーション能力育成を図るため、海外の学校との交流を行ってきた。

児童	相手先	交流活動の具体
6年	シカゴ大学附属学校 (アメリカ)	メッセージカード等紙面での交流
5年	St. Mary of the Cross Catholic Primary School Point Cook (オーストラリア) 臺北市立大學附設 (台湾)	オンラインでの LIVE 交流 ビデオレター等動画での交流
4年	St. Mary of the Cross Catholic Primary School Point Cook (オーストラリア) タイ 10 期シーグラスアーン学校 (タイ王国)	オンラインでの LIVE 交流 ビデオレターやイラスト交換等での交流

母語であっても外国語であっても、コミュニケーションの相手が大人であれば、例えばゆっくりしゃべってもらえたりわかりやすく言ってもらえたりする等、配慮が生まれてしまう。可能ならばできるだけ同世代の「子ども目線」の交流をさせたい。うまく伝わらないことやコミュニケーションに失敗する経験も必要だと考える。そこで次の手をどうするか、自分達なりに考えて、時には人の手を借りながらどう乗り切っていくかを自ら模索できるようにしたい。子ども達が自らの地域や国について学んだり、他者の文化について追求したりする中で、また、受信・発信といった他者との交流に子ども達が目を向ける中で、様々な表現方法に着目し、その一つとして外国語があることに気づくことができたなら、外国語を学ぶ意義があり、またそこで学ぶ外国語も深い学びになるはずである。

ただ、語学学習において「失敗を恐れずに使う(話す)ことが重要」とはよく聞かすが、失敗を失敗と感じさせない心理的安全の場でスピーキングを中心とした十分な言語活動を実施し、そしてポジティブに話す態度そのものが評価される言語活動を行えば、よほど失敗を恐れずに話すようになるのではないかと考える。そのためには、まず学級・学年集団における心理的安全性を確保したい。

そのために、8つの傾聴姿勢と資質・能力を備えた「良い聞き手」の育成が必要だと考える。子ども本来の素質もあるだろうが、全教科・領域・学校行事にわたる涵養・指導・訓練で鍛えることができる。

①Pay Attention (注目する) ②Show Interest (興味をもつ) ③Show Empathy (共感を示す) ④Ask Questions (質問をする) ⑤Withhold Judgement (判断を保留する) ⑥Maintain Eye contact (アイ
---

コンタクトを維持する) ⑦Use Positive Body Language (前向きなジェスチャーを用いる) ⑧ Paraphrase and Repeat back (パラフレーズと繰り返しをする)

これらの8つの傾聴姿勢・力を用いながら、相手の話を聞くことができる人が「良い聞き手」であると言える(西原, 2023)。

## (2) 英語運用能力の本質

「知っているも使えない表現が多いこと」「相手の発言にリアクションを返していないこと」等, 自分ができていないことやさらに工夫すべき点に子ども自身が気づき, それでは, どのようにつながり関わっていけばよいかということに思いを巡らせ, 思考・判断させて表現につなげることが本研究のねらいである。英語運用能力を高めるため, 英語科の授業づくりは言語材料と言語活動という二本柱を軸に進められることになる(言語材料: 発音・語彙・表現・文構造・文化等, 言語活動: 聞くこと・読むこと・話すこと・書くこと)。教師や周囲がこの点が課題だと感じて, 子ども自らが課題だと感じない限り, その練習活動・言語活動は課題であり, 長続きしない。子どもの「気づき」は子どもが課題を課題と認識するために不可欠である。

では, 何に気づけばよいのだろうか。気づくためにはどんなしかけが必要か。子どものリフレクション・シートには, 「日本語と違う点がたくさんあって, もっと調べてみたい」「英語の発音は最初を強く長く言う」等, 子どもなりの気づきが記されている。「気づき」とはそういうものだろうか。もっと「深い」気づきがあるのではないかと感じている。

## (3) 研究課題を達成するための手立て

言語活動への主体的な参加を通じ, 英語学習の新たな価値に気づき, 学習意欲が向上できるようにしたい。単元に到達すべき目標を下位項目に細分化し, 単元内に複数の言語活動を構成すると, 生徒はやり取りに必要な言語材料に習熟しやすくなり学習効果が高まる。実際の授業や評価場面で得られた生徒の英語発話について, 発話の質とやり取りの相互性を分析し, 言語活動中心の指導の在り方を考察する。

- ・長期的スパンと(複数単元)短期的スパン(中間指導)で子どもの成長を見とる
- ・子ども自身が言語活動の見通しを立てる場を設定する
- ・単元に到達すべき目標を下位項目に細分化し, 単元内で複数の言語活動を設定する

まず, 「複数単元をつないだ単元構想」により, 本年度は特に「聞くこと」「話すこと(やり取り)」「話すこと(発表)」の3領域における技能面と情意面の高まりを連動させて評価することによって, その効果を検証してきた。「複数単元をつないだ単元構想」における指導については, 次のように考える。複数単元をつなげることで, 児童は繰り返し友達とやり取りしながら表現の幅を広げるのに必要な知識及び技能を十分に定着させることができるようになる。スパイラルに一度出会った事項が何度も登場するように授業者は工夫をしたい。語彙や表現については一度取り上げれば, 児童の中に積み上がっていくという性質のものではなく, 異なる場面や機能の中で繰り返し

接することが重要であると考え。また、場面や状況に応じて、どの表現を使うことが求められるのか、思考・判断したことをもとに、表現することを経験できる。学びの過程において、思考・判断した上での失敗は全然かまわない。小学校中学年では、かなり難しい挑戦かもしれないが、**Try and Error** の精神で、「ことばを使いながら学び、学びながら使う」ことが授業内で可能となる。そのために教師と子どもが共有する適切な「目標と指導と評価」が重要であり、子ども自身が振り返りを活かしながら次へ進む、学びを深めることが肝要である。

「複数単元をつないだ単元構想」における評価については、次のように考える。「指導と評価の一体化-パフォーマンスと振り返りの相互作用-」において、何を「振り返り」するのが異なってくる。「単元＝山登り」と考えると、単元後半になってくると、その山の頂上（＝ゴール）のどこまで到達できているのか、全体の中で振り返ることが大切である。さらに「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、学習を始めてから児童に一定の変容が見られるようになるためには時間が必要となる。複数単元をまたいで繰り返し表現に慣れ親しませることで、児童が既習表現を想起し、思考を働かせた深いやり取りの様子を評価することが可能となる。

語彙や表現については一度取り上げれば、児童の中に積み上がっていくという性質のものではなく、異なる場面や機能の中で繰り返し接することが重要であると考え。また、場面や状況に応じて、どの表現を使うことが求められるのか、思考・判断したことをもとに、表現することを経験できる。学びの過程において、思考・判断した上での失敗は全然かまわない。小学校中学年では、かなり難しい挑戦かもしれないが、**Try and Error** の精神で、「ことばを使いながら学び、学びながら使う」ことが授業内で可能となる。そのために教師と子どもが共有する適切な「目標と指導と評価」が重要であり、子ども自身が振り返りを活かしながら次へ進む、学びを深めることが肝要である。

### 3 まとめ

本物の「ことば」を考えるためには、教室を普段から教師対子ども、子ども同士のコミュニケーションの場にする必要がある。それは母語でも英語でも同じことである。特に児童同士の「やり取り」を効果的にするためには、子ども達が実感をもって自分の考えや気持ちを表現できるような質問や発問を工夫しなければならない。自分が発することばや態度で相手がどう感じるか、傾聴と自己主張のバランス等外国語学習初期段階でも、十分ことばの役割を、実感をもって感じる事が可能だろう。

（ 西原 美幸 ）